

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370902

研究課題名(和文) 後漢墓からみた国家の統治と在地社会の研究

研究課題名(英文) Study of the governance of the state and the local society seen from the Han tomb

研究代表者

小澤 正人(Ozawa, Masahito)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：00257205

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は後漢における国家と地域社会の関係を墓葬資料から明らかにすることを目的とする。後漢の小型墓には構造と副葬品に強い統一性が認められ、その背景には共通の規範の存在が考えられる。このような規範は国家が制度として定めた皇帝陵などの墓制の影響下に成立したと考えられる。後漢小型墓の各地への普及は、その規範が地域の文化伝統を越えて受容されたことを意味しているものであり、それを可能としたのは後漢による統治の浸透と考えられる。後漢の統治が浸透することで、人々は国家を自らの社会や生活の規範とするようになり、そのため国家を背景とした後漢小型墓の規範を受容したのである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the relationship between the state and the community in Eastern Han from the tomb data. A strong unity is recognized in the tomb of Eastern Han. In the background there was a spread of common norms. This norm was established under the influence of the state tomb system. The dissemination of the Eastern Han Tomb means that the norm was accepted beyond the local culture tradition. It was realized through the penetration of national governance. As the governance of Eastern Han penetrated, people became to adopt the state as a norm of their society, and therefore accepted the norm of the Eastern Han Tomb.

研究分野：考古学

キーワード：漢墓 後漢

1. 研究開始当初の背景

後漢時代は一般に豪族勢力が伸長した時期として捉えられており、国家の統治力はその初期を除き弱く、地方は豪族の支配に置かれていたとの認識がもたれてきた。しかし、近年、後漢の統治のあり方については再検討がなされており、国家の統治がその末期まで在地社会の秩序維持に一定の役割を果たしていたとの指摘もなされている。この点については現在も結論は出ていないが、この論争からも明らかのように、後漢という国家を考える時、国家と地方在地社会の関係をどう捉えるのが鍵となっているのである。

従来、後漢国家研究は主に『後漢書』などの伝世文献から行われてきた。しかし伝世文献はそのほとんどが中央の政策を記録したものであり、それが実行された地方での実態を記録した資料はほとんど見当たらない。そのためどうしても中央の政策や制度からの検討が中心となり、国家の政策に地方在地社会がどう反応したかを論じることは難しかった。この欠点を補うために、近年では、木簡・竹簡、墓誌・石刻など、新たに出土あるいは発見される一次資料が注目され、新たな成果を上げつつある。しかしこれらの資料にも地域による偏在という資料上の制約が存在しており、そのため全国的な視点からの網羅的な検討ができないという、研究上の限界が存在しているのである。

このように従来の文献資料(伝世文献と出土文献を含む)からの後漢国家の研究には、どうしても資料上の制約と研究上の限界がある。

2. 研究の目的

上記のように後漢国家研究を進めるためには、従来の文献からの研究とは異なったアプローチが必要となる。そこで申請者が注目するのが、墓葬資料である。

後漢墓の調査はほぼ全国で行われており、すでにかかなりの数の墓葬資料が蓄積されている。従来から後漢墓の特質として、地域性が小さく画一性が高いと同時に、細部には地域性が存在する、といった点が指摘されてきた(中国社会科学院考古研究所『中国考古学秦漢巻』2010年など)。そしてその背景については、葬送習俗といった文化史的な脈絡で解釈されることが多い(王仲殊『漢代考古学概説』1984年など)。しかし町田章や上野祥史が指摘したように(町田章「華北地方における漢墓の構造」1977、上野祥史「漢墓資料研究の方向性」2003)、中国古代では墓葬には単なる死者を埋葬する場としてだけでなく、被葬者の身分を表現するといった社会的側面も存在していたのである。

従って上記のような後漢墓に画一性と地域性が現れるといった現象についても、単に文化史的な脈絡による解釈だけではなく、後漢王朝による社会秩序の反映、すなわち国家による支配と在地社会の受容と反応の結果

と考えることが可能である。逆に言えば、後漢墓に見られる画一性と地域性のあり方を検討することで、後漢王朝による支配と在地社会の受容・反応の実態を明らかにすることができると考えられるのである。

申請者はこれまでも後漢時代に先行する戦国時代から前漢時代の墓葬を対象にして、国家による地方統治のあり方を検討してきた。その結果、秦の統一により各地域ではそれまでの墓制が破壊されるが、その後の墓制は、秦の中心地であった関中地方のものがそのまま持ち込まれる地域と、部分的には秦の墓制を取り入れるものの独自色が強い地域の両者があり、墓制は完全に統一されておらず、そこから秦の支配が表面的なものに留まっていたと考えられること、前漢前期・中期では基本的には秦の墓制が継承されるものの、徐々に前漢墓としての特色が全国的に定着しており、漢の支配が着実に浸透しつつあると考えられること、などを明らかにしてきた。このような墓葬資料を使った研究成果は、秦から漢への国家による統治が、当初は軍政を主体とするものであったが、武帝期以降は民政を重視するようになったという文献資料からの国家統治の理解(例えば藤田勝久『中国古代国家と地方社会』など)とも矛盾しないものであり、墓葬資料を用いての中国古代国家研究の有効性を提示するものとなっている。

本研究はこのような申請者の墓葬資料を用いた中国古代国家研究の成果と方法論に基づき、それをさらに継続・発展させることを目指すものであり、前漢後期から後漢時代を対象にして、墓葬資料から国家と地方在地社会のあり方を検討し、そこから後漢王朝の特質を明らかにすることを目的に構想されたものである。

3. 研究の方法

研究は前漢から後漢への墓葬の変化を明らかにした上で、国家と在地社会の関係について考察を加える、といった方法で進められた。

4. 研究成果

研究成果については、1 前漢から後漢への墓葬の変化、2 国家と在地社会の関係についての考察の順に記述する。

1 前漢から後漢への墓葬の変化

洛陽地区

墓葬構造：前漢に入ると洞室磚室墓が発達する。墓室は付属施設のない「単室墓」を基本とするが、中期以降は耳室を付設する「耳室付単室墓」が多く見られる。新・後漢初期も両者は継続するが、同時に羨道と主室の間に方形の前室を設けて前室・主室構造を基本とする(耳室は主に前室に付設する)「連室墓」が出現する。後漢前期には耳室付単室墓が姿を消し、単室墓と連室墓、特に連室墓が中心となる。後漢中期もこの傾向は変わらな

いが、同時に前室と主室の間に羨道を設ける「複室墓」が現れる。後期になると複室墓には前室と主室との間に中室が設けられるなど、部屋数が増えるようになる。

副葬品：前漢時代には鼎・盒・壺といった青銅器や漆器の模倣陶器を中心として、倉・竈・井戸といった模型明器が加わるのが基本である。後漢前期以降になると模倣陶器はほぼ姿を消し、日常陶器（供膳器と貯蔵器が中心）と模型明器・動物俑の組合せが基本となる。

西安地区

墓葬構造：前漢中期までは洞室木槨木棺墓が造られるが、後期になると洞室磚室墓へと移行する。前漢後期は単室墓と耳室付単室墓が基本となる。後漢前期になると耳室付単室墓が姿を消し、単室墓と連室墓が基本となり、後漢時代を通して継続する。後期になると複室墓が造られるようになる。

副葬品：前漢時代には模倣陶器と倉・竈・井戸といった模型明器が副葬品の基本である。後漢前期以降になると模倣陶器はほぼ姿を消し、日常陶器（供膳器と貯蔵器が中心）と模型明器や動物俑の組合せが基本となる。

南陽地区

墓葬構造：南陽地区では豎穴墓が基本で、洞室墓はみられない。前漢中期までは戦国時代以来の木槨墓が継続している。前漢後期に入ると木槨墓とともに、磚槨墓が造られるようになる。王莽期になると磚室墓が出現し、後漢を通して磚槨墓と磚室墓が基本となる。磚室墓は連室墓が基本だが、後漢後期には複室墓も造られるようになる。

副葬品：前漢時代には模倣陶器と模型明器が基本である。後漢になると模倣陶器はほぼ姿を消し、日常陶器（供膳器と貯蔵器が中心）と模型明器・動物俑の組合せが基本となる。

広州地区

墓葬構造：広州地区では豎穴墓が基本で、洞室墓はみられない。前漢前期には戦国時代からの木槨墓と木槨墓に入口を付けた単室木室墓が造られる。前漢中期になると木槨墓は姿を消す。前漢後期から後漢前期にかけての時期には、連室木室墓が姿を現す。後漢になると、木室墓とともに磚室墓が造られるようになる。前漢前期には単室・連室の磚室墓がみられる。やがて後期には木室墓は姿を消すとともに、磚室複室墓も姿を現す。

副葬品：前漢時代には鼎・盒・壺といった模倣陶器を中心として、模型明器が加わる。後漢前期以降になると模倣陶器はほぼ姿を消し、日常陶器と模型明器や動物俑の組合せが基本となる。

以上の各地区の検討を総括すると以下の通りになる。

(1) 墓葬構造

前漢時代から洛陽・西安では洞室墓、それ以外の地域では豎穴墓が造られる。これは土質の違いが影響したものと考えられる。

全体的には木槨墓・木室墓から磚室墓へ

の移行が認められる。ただしその移行には時期差が見られ、洛陽では前漢前期から磚室墓が造営されるが、西安・南陽では前漢後期から、広州では後漢に入ってからである。

磚室墓は当初は単室墓であったが、後漢に入ると連室墓が造られるようになり、これが普及する。さらに後漢後期には複室墓の造営が始まる。

(2) 副葬品

前漢では鼎・盒・壺といった青銅器や漆器の模倣陶器を中心として、倉・竈・井戸といった模型明器が加わるのが基本であった。後漢になると模倣陶器はほぼ姿を消し、日常陶器（供膳器と貯蔵器が中心）と模型明器や動物俑の組合せが基本となる。

2 国家と在地社会の関係についての考察

前漢の小型墓は戦国時代後期に成立した秦の小型墓が基本となっている。統一秦から前漢の前期にかけて、模倣陶器（鼎・盒・壺）と模型明器といった副葬品の基本構成は漢の領域へと広がっていった。ただし墓葬構造には違いが見られる、華北では秦墓の特徴である洞室墓の普及、華中以南では戦国時代以来の木槨墓の残存、といった地域性が強く残る。

このような前漢の小型墓は、後漢になると変化が生じる。墓葬構造では磚室墓への転換がみられ、そのプランも単室墓だけではなく、連室墓が各地に現れている。副葬品も模倣陶器が姿を消し、供膳器と貯蔵器を中心とした日常陶器と模倣明器による組合せを基本とするようになる。前漢墓では副葬品では統一性が見られたものの、構造では地域性が残っていたが、後漢墓では副葬品・構造ともに統一性が高まったのである。つまり後漢には「磚筑で、単室または連室」「日常陶器と模倣明器」を特徴とする墓制が成立したのである。この変化の中で特に注目したいのが、副葬品において前漢までの模倣陶器という伝統が中断されたことである。

副葬品のうち模倣陶器セットの成立には、秦という国家の関与が認められる。秦では皇帝陵とその陪冢の制度が整えられ、その副葬品として模倣陶器セットが成立したのである。前漢は秦の墓制を継承しており、そのため小型墓も秦墓の小型墓の墓制を継承している。模倣陶器が副葬されなくなったことは、前漢滅亡という社会の混乱の中で前漢墓制の伝統が中断したことの反映と考えられる。そして後漢の成立とともに新たな墓制が成立したが、そこでは戦国時代の供献に用いられた青銅器や漆器のセットが原型となっている模倣陶器はもはや採用されず、日常で使われる実用的な陶器のみが副葬されるようになったのである。

このような国家による墓制は、小型墓の構造にも影響を与えている。皇帝陵の埋葬施設は明らかではないが、諸侯墓クラスである大型墓の墓室は木造で、墓室は棺室（「梓宮」）

とそれに連続した前室である「明堂」、そして副葬品の置き場である「便房」からなる「正蔵」と正蔵を取り囲む回廊状で副葬品を納めた「外蔵櫛」から構成されている。前漢小型墓のうち洛陽や西安に見られる単室墓、特に耳室付単室墓は正蔵部分の省略形であると考えられる。さらに後漢に入り成立し急速に普及した連室墓も正蔵部分を省略化したものであり、特に明堂部分を拡大したものと考えられる。

つまり後漢の小型墓は、皇帝陵に代表される国家的な墓制を縮小したものを規範として成立したのである。ここで「規範」としたのは、後漢が国家として小型墓レベルまでを規制した資料が確認されていないことによる。つまり、小型墓の構造や副葬品は国家が法令などで直接的に規定はしていないが、国家が制度として定めていた皇帝陵などの墓制の影響下に成立したのである。

ここで注目したいのは、小型の後漢墓が極めて短期間に各地へと普及していた点である。このことは小型後漢墓の規範が各地に伝わり定着したことを意味している。一般的に埋葬のような習俗は保守的であり、地域の文化伝統の影響が強い。しかし後漢小型墓はそのような地域の文化伝統を越えて普及している。そこには小型後漢墓という国家を背景とした新しい規範が、それまでの地域の文化伝統を越えて受容されることが認められるのである。それを可能にしたのは、後漢国家による統治の浸透と考えられる。つまり、後漢国家の統治が浸透することで、人々は国家を自らの生活の規範とするようになり、そのため国家を背景とした小型後漢墓の規範を受け入れたのである。

従来後漢は、豪族など地域勢力が強く、地域社会における国家の存在は希薄であると考えられてきた。しかし地方豪族が儒教的教養の中で、あるいは官僚として、あるいは地方の名望家として、国家に組み込まれていたものであり、全体としていけば、国家の統治は浸透し、社会規範としての役割を果たしていたと考えられる。後漢小型墓の成立と普及はそのような「規範としての国家」を背景としたものであると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

1. 小澤 正人「巢湖漢墓の墓制」(『常民文化紀要』第33輯 査読なし 2018年3月)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小澤 正人 (OZAWA, Masahito)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：00257205